

2018 年度日本語教育学会 学会賞 受賞コメント

伊東祐郎（国際教養大学専門職大学院・教授）

この度は、日本語教育学会の会員として名誉ある表彰を受けることになり、心より感謝申し上げます。

「日本語教育学会賞」は、日本語教育学に関わる学術研究活動、日本語教育または日本語教員養成に関わる実践活動、日本語教育の社会的認知の向上や社会的環境づくり等に貢献する情報交流活動を評価して授与されるもので、受賞の知らせを受けたとき、果たして私自身がそのような栄えある表彰を受けるに相応しい取り組みを行ってきたのだろうか、十分に貢献してきたのだろうかなど、自問自答する状況でした。

私は、日本語教師になって 30 年以上経ちますが、駆け出しの頃から、学習者の日本語能力の測定のためのテスト作りには自信がありませんでした。特に口頭表現力や文章表現力の測定や評価は、さまざまな要因が影響するがゆえに、私にとっては確信が持てない領域でした。

学会員になって間もなく、当時学会の特別委員会である「試験分析委員会」の委員になるという機会に恵まれ、日本語能力試験の分析を担当することになりました。この委員会では、日本語能力試験結果の統計データに基づいて問題項目の品質や精度を検討し、報告書にまとめるのが主な仕事でした。ここで初めて具体的な統計データを手にして数値の解釈の仕方や受験者の応答の在り方から良問判定の方法について学びました。これらの経験を通してテスト理論や心理測定理論などに触れたことによって、日頃作成しているテストが学習者の日本語能力を理想的な形で測定しているかどうかを考えるようになりました。そして、テスト研究という領域に足を一步踏み出すきっかけとなり、振り返ってみると自らの研究テーマの中心となっていました。

日本語教師の日本語能力の評価や測定のためのテスト開発に係わる専門性は、これまでに培ってきた経験知や実践知、また暗黙知として私たちの資質や能力の一部となっています。それらの力量は他者に伝授されたり共有されたりすることは多くはありません。しかしながら、昨今、テストが教師の一方的な情報入手手段であった時代から、受験者や第三者に対しても様々な影響を及ぼす存在となってきた以上、テストをはじめ測定・評価に対する説明責任は自ずと出てきました。テスト・評価の透明性や一貫性がさらに問われるようになってきています。研究はそれらのためのものであり、最終的には公平なテスト実施に向けての姿勢や取り組みであると信じています。

言語テストが教授と学習効果についての情報を得る上で必要不可欠なものである以上、テスト開発とその研究は、時代のニーズに即した役割と使命が求められます。今回の栄誉を心の励みとし、日本語教師の評価に対する認識をさらに高められるよう、また、日本語教育全体の発展のために、引き続き精進を重ねて参りたいと願っています。



2018 年度日本語教育学会 奨励賞 受賞コメント

田中祐輔（東洋大学・准教授）

この度は、日本語教育学会奨励賞の荣誉に預かり、会員の皆様、ならびに、事務局の皆様にご心より感謝申し上げます。また、研究の遂行と教育実践に際しご指導くださった先生方、ご支援とご協力をくださった皆様に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

このような栄えある賞をいただきましたこと、いまだに信じられない気持ちで一杯ですが、これも、今日まで私がお世話になった先生方や先輩方、上司、同僚の皆様からの賜物であります。同時に、“しっかり頑張りなさい”と背中をポンと押していただいたようにも感じ、身の引き締まる思いであります。

グローバル化の進展と我が国のさらなる国際化の中で、日本語教育の意義や役割はますます高まっているものと考えられます。殊に、日本と諸外国との関係深化・相互理解は必要不可欠であり、広くは世界情勢の安定と連携強化を促進する極めて重要なものと考えられます。こうした中、国内外における日本理解や多文化共生を支えてきたのが、日本語の学習と教育です。私がテーマとしてきた日本語教育の歴史は、世界が、日本という国とそこで花開いた言語と文化を理解し、共に対話を重ねたプロセスそのものでもあります。

奇しくも今年令和元年であり、人々が心を寄せ合う中で文化が生まれ育つ新たな時代が展望されています。日本語教育は、多様性やアイデンティティを尊重し合いながら、異なる言語、文化、価値を乗り越えた関係構築の実現に寄与することが求められていると考えられます。

このような時代の転換点において、日本語教育の「歴史」に思いを馳せることは大変重要であります。私達の日本語教育の実践、あるいは研究は、必ず何らかの形で過去から現在に至る人々の教育実践や学習の歩みと関わりを持つものです。いかなる教授法、文法、教材でも、過去から全く切り離された形で独立して成立することはあり得ず、先人達の知見や経験、慣習、思想などから多分な影響を受けるものです。そのため、これから展開される日本語教育について考える場合も、「私達はどのような歩みを経て来たのか、なぜこうした教育が行われているのか」を理解する必要があります。とりわけ、新たな教育内容や手法、さらには今後のビジョンを検討する際には、現行の教育が形成された過程を正確に理解していなければ、有効な変化を起こすことができずに、かけ声倒れに終わる可能性もあります。歴史的な考察は日本語教育の実践や研究に欠かすことができないと考えられるのです。

今後の研究・実践に際しましても、昭和から平成、そして令和へと移りゆく時代の中で、先人達が日本語教育を通してどのように国際文化交流に取り組みされたのか、そこにいかなる苦労や努力があり、またそれをどのように乗り越えられたのかについて考察を行い、日本語教育の発展の基盤となる知見を記録保存してゆく活動に誠心誠意取り組んで参りたいと思います。

重ねまして素晴らしい荣誉を賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。



2018 年度『日本語教育』論文賞 受賞コメント

野村和之（香港中文大学・客座助理教授）

望月貴子（香港浸会大学・日語課程統籌）

この度の受賞については、光栄に思うと同時に驚きをもって受け止めております。なぜなら、本論文が『日本語教育』論文賞を受賞するという出来事は、私たちの『日本語教育』に対する理解を一新し、その懐の深さを鮮やかに印象づけるものだったからです。

香港は最新の市勢調査で人口の1.8%が日本語を話すと回答する日本との関わりが深い地域です。その香港で日本語教育に携わり、野村は約10年、望月は30年余りとなります。その間、大学・中学校・民間の日本語学校など、さまざまな教育現場における学習者との巡り合いがありました。

熾烈な競争社会である香港には、十代の若者が学校や家庭で多大なプレッシャーにさらされ、それを苦に命を断つ子すらいるという切ない現実があります。本論文はそのような社会文化的文脈を背景に、日本語学習が単なる趣味の範疇を超え、心の拠り所という自己表現・自己実現の場となりうる点を明らかにしました。

ただ、このような研究は、教授法や習得研究など『日本語教育』で主流を占める分野とは色合いが異なります。また、本論文の方法論であるエスノグラフィーも、[上野美香 \(2013\)](#) や [八木真奈美 \(2015\)](#) などの優れた掲載例こそあれ、蓄積が豊富とはいえないのが現状です。

そのため当初、果たして『日本語教育』への投稿にこだわるべきなのか、言語学習者のアイデンティティやエスノグラフィーを含む質的研究法がテーマ・手法として確立している海外の学術誌を发表の場として考えるべきではないのか、迷い悩んだことも事実です。

しかし、[宇佐美洋 \(2012: 67\)](#) は『日本語教育』に望まれる方向性についてこう述べています。

「社会」と直接関わる研究としては、「普遍性・一般性」を追求するだけでなく、社会で現に起こりつつある具体的な問題に正面から向き合い、そこで「いま求められていること」について個別の処方箋を提示していく、という方向性も必要である。

社会に適應できず生きることを諦めてしまう子どもたちも少なくない、香港の過酷な現実を身に置く私たちにとって、『日本語教育』への投稿へと背中を押してくれたのはこの一文でした。

幸いにも迷いを振り切り投稿した論文が採用となり、何と今回の受賞にまで至ったわけですが、論文の趣旨を深く理解し共感して下さった、『日本語教育』の査読者・編集委員並びに関係者の方々には心よりお礼を申し上げます。

本研究を通して、日本語教師の責務とは学習者一人ひとりの人生に寄り添い、日本語を介した自己実現を支援することなのだと、香港の若者たちは教えてくれました。それでは、一体どのように学習者の自己実現を支援すればよいのでしょうか。多様な現実に応じた答えがありえますが、まずは私たち教師が、学習者の心の軌跡に思いを寄せることから始まるのではないのでしょうか。

今回の受賞を励みに今後も邁進するとともに、現場・領域・方法論の枠を超え、幅広い方々と手を携えながら、研究・実践の輪を広げていきたいと願っております。ありがとうございました。



2018 年度日本語教育学会 学会活動貢献賞 受賞コメント

嶋田和子（アクラス日本語教育研究所・代表理事）

この度は 2018 年度学会活動貢献賞を賜りましたこと、大変光栄に存じます。受賞者 3 名を代表いたしまして、御礼申し上げます。今年の学会活動貢献賞は奇数年に授賞ということから、査読協力者として 10 年以上在任し、一定の件数を査読した者に授与されることとなりました。事務局からご連絡をいただいたとき、初めて 10 年もの間査読に関わらせていただいたのだと、驚きをもってメールを読み進めました。

私が学会員になったのは、1991 年のことでした。1、2 度参加したものの、「日本語学校の現場教師にはあまり役に立つことはない」などと勝手に決め込み、その後しばらく参加しておりませんでした。

しかし、1999 年評議員に選出されてからは、「選ばれたからには、絶対に欠席しない」と心に決め、毎回参加、学会誌も熱心に読み始めました。こうした活動が、どれだけ私の教師としての幅を広げ、成長につながったかわかりません。多くの方々との出会い、幅広い課題への気づき、まさに私は学会活動を通して、「成長し続ける教師」として歩むことができたのだと思っています。そして、ある日、「学会誌の査読協力者」としての依頼をいただき、それ以来関係論文が来ると査読に関わってまいりました。

査読は、定められた評価項目にそって、評価のポイントを念頭に置いて進めてまいりますが、「他の方の論文を評価する」という査読作業は、常に身の引き締まる思いです。何度も読み返し、時間を置いて既に評価したものを改めて見直してから提出してきました。1 本の論文を評価していく過程は、自らの実践・研究の振り返りとなり、自分自身の成長にもつながりました。査読は、大変な作業ではありますが、それが魅力の一つでもあります。

私は、長く教育現場に身を置いてまいりました。そして、査読においては、教師教育、会話教育、教材開発等に関わるが多かったのですが、「学会誌」を手にしていつも、「もっともっと実践研究論文が『学会誌』の紙面に登場してほしい」と強く感じております。今、教育実践の多様化が進んでいます。だからこそ、実践研究がより盛んになり、論文化され、多くの人々と共有されることは、日本語教育の質の向上に重要であると考えます。

公益社団法人となった学会が目指すところは、「共に集い、行動する学会」であり、「共に学び合う場、研鑽の場」です。私は、今後も、現場の一教師として、一学会員として、研鑽を積んでいきたいと思っております。最後に、査読過程においてご連絡、取りまとめなど、さまざまな形でお世話になりました学会誌委員会の方々、学会事務局に、心よりお礼申し上げます。

この度は、ありがとうございました。そして、これからもどうぞよろしく願い申し上げます。

